

## 襲のあわい——その火口<sup>ほくち</sup>①

宗教学者・中沢新一に、「エデンの園の大衆文学」というタイトルの小論がある。その一節を、いわば、とっかかりとでもいったものにしてみたい。

民間宗教のご教祖さまたちのことを考えてみよう。世の中には、トランスに陥りやすく、そのトランス体験のなかで不思議なヴィジョンをよく見るといふ体質を持った女性だとか、異常に感覚がとぎ澄まされ、いわゆる第六感に恵まれていて、予知の能力や通視能力をもっているという人は、何人もいる。ところが、その人たちは、けっして出口ナオや中山みきのようなタイプの、大きな存在感をもった「ご教祖」にはなりえないのである。

では、その他有象無象と「大きな存在感をもった「ご教祖さま」」を分けるものはなにか。たとえば超能力者といわれる者たちのように、その聖性に結びついた強度の体験が小さな理解力の範囲におさまってしまうか、それとも、それを重層的な全体性のなかにつつまこんで、ダイナミックに理解して表現するかにあるとされる。その理解と表現は、内面に燃え上がる強度を、神話的に理解し、神話を利用して表現するというやり方がとられるのだという。

もっとも、この問いと区別も先行するより大きな立問につづいてのものでしかない。中沢の師・柳川啓一のそれによるものだ。

宗教の本質を、いや宗教の根源である聖性というものの本質を、われこそは宗教でござい、などと言っているものなかに探し求めるのは、愚か者のすることだ。探し物は、机の上に放置されてある。道端にころがっている。世の識者などが、けっして寝たりしない類の小説の中などに、それは無造作にころがっている。

だから、『沈黙』を読むぐらいなら『大菩薩峠』を読みなさいといわれる、『十戒』を観るぐらいなら『ローズマリーの赤ちゃん』を観なさいと勧められる。タイトル「エデンの園の大衆文学」も、その後半部は、ここに由来する。

いわゆる大衆文学と純文学を対照して、いわれる。

大衆文学の書き手たちは、宗教という現象には、せつかくにもこんなに魅力的な感覚の強度がみちみちているのに、せつかくのその強度を、…〔純文学は：筆者挿入〕まじめだけれどもひどくつまらないものにしていて、と感じているようにみえる。

「聖性をめぐる最良の野生の表現に自分はいま出会っているのだ」とまで、中沢をしていわしめるのは、かかる大衆文学の書き手、山田風太郎による「切支丹物」である。しかも、短篇集『売色使徒行伝』収録「姫君何処におらすか」をとりあげる。実在のフランス人宣教師ベルナルド・プティジャンが、1865年3月17日、長崎浦上、二百数十年ぶりに建てられた天主堂で遭遇する史実ベースの、しかし、純然たるフィクションである。鎖国令下、苛烈な弾圧により殲滅されたとおもわれていたキリシタンが、突如、出現し、いまも今、おそおそと神父に近づいてきている。さて、「姫君何処におらすか」に舞台を廻すべく、奈落へ降りたつことにしよう。

…私をとりかこんでいる人々のなかから、ひとりでも主の

ために礼拝者を得しめたまえ、と嘆願いたしました。

ほんの一瞬祈ったかと思うと、年のころ、四十歳か五十歳くらいの小さな婦人が、そっと私の傍にちかづき、胸に手をあててささやきました。

「ここにおります私どもは、みなあなた様とおなじ心（傍点筆者）でございます」

神父は、この「おなじ心」の発見とその喜びをローマに書き送った。しかし、つづく手紙には、しだいに苦悩の翳りが色濃くさすようになる。「おなじ心」であるはずの、かれらキリシタンの信仰が、ローマの正統的理解からおおしく逸脱し、異端ともいべき形態に「変形」していることに気づくことによる。長崎湾内の小島、部漣島の長老をして、「姫君何処におらすか」は、かれらの信仰の教理を、神父との対話のかたちで、語らせる。

「十さまは、ナサレテと申す国の若君で、姫君お影さまを恋したわれたお方でござえます。」

「え、ゼズスさまが、サンタ・マリアさまを恋したわれたと？」

「はい、ところが十さまには十三人のお弟子がござって、その十三番目のジョタスという男が悪人での。こいつめがお影さまにもちかけて、もったいなやお影さまは、牛小屋の中で、ジョタスの子をお生みになりました…」

「おお、マリアがユダの子を！」

「そこで十さまは、こがれ死、かなしみ死をなされたのでござるが、そのまえの晩、ほかの十二人の弟子に、ひときれの肉をひきちぎって、御馳走なされたら、みな満腹して、あまりがあつたと申します。…」

イエスを「十さま」、聖母マリアを「お影さま」とし、両者を情人関係におく、あまつさえ、「お影さま」とユダたる「ジョタス」との姦淫を説く隠れキリシタンの教理的「変形」を、山田は大衆文学の書き手として感性の赴くまま奔放に綴る。そして、ローマの正統的教理を体現する神父をして、その怒りと震えのうちに語らしめる、「御主さまのおんいけにえも、十二使徒も、御復活も、なにもかもめちやめちやです」。

ここで、その冗長は承知しつつも、あえて問うべきなのだろう——「なぜに？」と。もちろん、その「変形」ゆえに！ だが、あえて問われるというのも、その「ゆえに」の「なぜに？」ということ——ただただ「おなじ心」のゆえに」と応じるべきなのだろう。

中沢は、この「心」の「おなじ」に神話の論理の規則のひとつ——「反転」をみる。この「おなじ」が、二百数十年にわたるその純化が、なぜか、この「なにもかもめちやめちや」の「変形」を結果するからだ。他の有象無象とは異なり、「大きな存在感をもった「ご教祖さま」」が、その「不思議なヴィジョン」を「重層的な全体性のなかにつつまこんで、ダイナミックに理解して表現」するのも、この「反転」を軸としてのこと、だからこそ、その「理解」と「表現」が「神話的に理解し、神話を利用して表現するというやり方がとられる」というわけだ。

こうして、「おなじ」が「襲のあわい」と立ち現れる。それを火口<sup>ほくち</sup>としたい。